

子ども・若者研究への／からの接続に向けて

川中大輔

子ども・若者参画研究をめぐって、多くの人々が抱く問いは「どのようにして参画を進めるのか」だろう。それは、制度的な環境をどのように整えるのかという政策形成の観点からのアプローチもあれば、個別具体的な参画の場でどのように支えるかという場づくりや対人援助の観点からのアプローチもある。これらは政策学や法学、社会福祉学といった領域の知見を軸に用いるものであるが、学校教育や社会教育の現場での参画推進となれば教育学の知見も加わってくる。

「どのように」の問いは今もなお、子ども・若者参画研究の中心にあると言えるだろう。

また、子ども・若者参画とは「何であるのか」、それを「なぜ進めるのか」という問いも多くの人々が向き合ってきたものだろう。関係者間での子ども・若者観の不一致ゆえに、向き合わざるを得なかったという方が正確かもしれない。子ども・若者は保護／教育指導の客体ではなく、権利／参加の主体であるということを理念的／実的に明らかとし、提示してきた研究／実践の歴史が結実して、今般の子ども・若者参画推進の流れに至っている。もっとも、子ども・若者は多面的な存在であり、置かれた状況／場面に応じて、子ども・若者観はせめぎ合うことが常であり、

「何」「なぜ」の問いは決着がついたものではない。基盤を整える研究として大切にされるもの

だと言えるだろう。

「どのように」「何」「なぜ」の問いに関連する研究に厚みをもたらすことで、これからの子ども・若者参画研究は良いのだろうか。そうではあるまい。子ども・若者の特徴／特性は固定されたものではない。子ども・若者の現代性を探る社会学的研究とも接続していく必要がある。社会環境の変化に伴って、当然ながら社会化

(socialization) のされ方も変わっていることは言うまでもない。子ども研究や若者研究の知見に目を向けた時、子ども・参画のあり方／やり方について、見直しを迫られることは少なくないだろう。

加えて、子ども・若者がどのように参画しているのか／いないのかという実態を捉えつつ、その意味や要因、正負の影響を明らかとしていくことも一層求められよう。子ども・若者参画の場では、意図せざる結果として、問題を孕んだ社会規範の再生産や、格差／分断／差別の助長が起こっているかもしれない。また、一般的に子ども・若者参画の場と見做されていないところで、子ども・若者は自由に／勝手に参画を思いもよらぬ形で実現しているかもしれない。参画しないことで、何かしらの意味を発しているかもしれない。

子ども・若者研究への／からの接続がもたらす投げかけは、子ども・若者参画研究に新たな広がりや厚みをもたらすのではないだろうか。

(関西学院大学)

